

# 研究成果情報

令和3年度

帰化アサガオ類などの生育を抑える、新しい大豆用全面茎葉処理除草剤の効果		
[要約] 帰化アサガオ類やヒユ科雑草などの大豆の難防除雑草は、 <u>全面茎葉処理</u> が可能なフルチアセットメチル乳剤及びイマザモックスアンモニウム塩液剤を含む体系で防除できる。		
新潟県農業総合研究所作物研究センター 栽培科	連絡先	TEL 0258-35-0836 FAX 0258-35-0021

## [背景・ねらい]

近年、一部の大豆ほ場で帰化アサガオ類を中心とした難防除雑草が蔓延しているが、現在の除草体系では防除が困難である。このような雑草に対して効果が高く、かつ全面茎葉処理が可能な除草剤が、新規に開発または登録拡大されている。そこで、新規除草剤を用いた除草体系により、帰化アサガオ類等の難防除雑草被害の抑制を図る。

## [内容]

- 1 フルチアセットメチル乳剤及びイマザモックスアンモニウム塩液剤は、全面茎葉散布ができ、帰化アサガオ類やヒユ科雑草に対して高い効果がある。
- 2 中耕・培土の実施時期に合わせ、フルチアセットメチル乳剤及びベンタゾン液剤＋イネ科専用除草剤を散布する(表1)。
- 3 大豆2～3葉期に帰化アサガオ類またはヒユ科雑草が目立つ場合は、フルチアセットメチル乳剤を使用する(表1)。しかし、同生育時期にタデ科雑草やイネ科雑草の発生が目立つ場合は、大豆2～3葉期にベンタゾン液剤＋イネ科用除草剤、大豆4～5葉期にフルチアセットメチル乳剤を使用する。
- 4 大豆は種後に散布する土壌処理除草剤の効果が低く、大豆出芽と同時に雑草が蔓延した場合は、大豆出芽揃期から初生葉展開期にイマザモックスアンモニウム塩液剤を散布する(表1)。
- 5 上述の除草体系により、帰化アサガオ類やヒユ科雑草を抑制する(図1、2)。
- 6 大豆に対して薬害症状が発生する可能性があるが、生育に影響はなく、収量は同等以上である(表2)。

## [導入効果]

帰化アサガオ類などが多発する大豆ほ場で高い除草効果が得られ、大豆の安定生産ができる。

## [導入対象]

難防除雑草が多発する大豆ほ場

## [留意点]

- 1 除草剤は「新潟県農作物病害虫雑草防除指針」などを確認し、適正に使用する。
- 2 大豆開花期以降も帰化アサガオ類などの雑草が蔓延する場合は、畦間・株間処理が可能な除草剤を、使用基準の範囲内で使用する。

[具体的データ]

表1 帰化アサガオ類を中心とした難防除雑草に対する除草体系

	大豆播種後	出芽揃期～ 初生葉展開期	大豆2～3葉期	大豆4～5葉期
新体系1	土壌処理 除草剤	—	フルチアセットメチル	ベンタゾン＋ イネ科用除草剤
新体系2	(土壌処理剤 効果低)	イマザモックス アンモニウム塩	フルチアセットメチル	ベンタゾン＋ イネ科用除草剤
慣行体系	土壌処理 除草剤	—	—	ベンタゾン＋ イネ科用除草剤

注 イネ科用除草剤:キザロホップエチルなど、イネ科雑草に効果の高い除草剤。

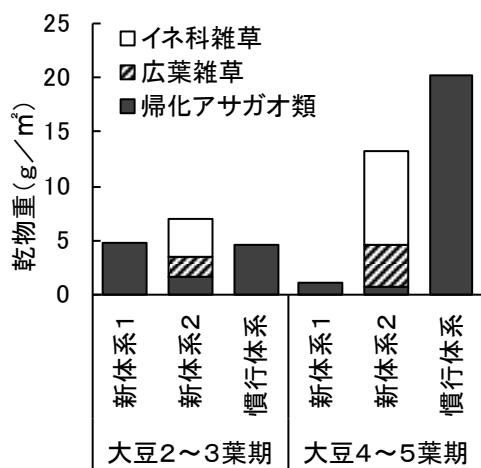


図1 帰化アサガオ類多発生ほ場における除草体系別雑草乾物重

注 広葉雑草は、除草剤が効かないツユクサを除く。

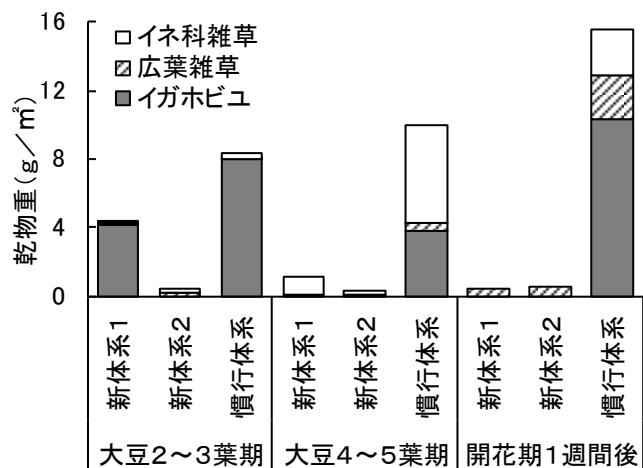


図2 ヒユ科雑草多発生ほ場における除草体系別雑草乾物重

表2 除草体系別の大豆成熟期の生育及び収量

ほ場	試験区	主茎長 (cm)	分枝数 (本/株)	有効莢数 (莢/㎡)	百粒重 (g)	収量 (kg/10a)
帰化アサガオ類 多発生ほ場	新体系1	61	5.2	463	35.4	261
	新体系2	63	5.3	433	36.1	272
	慣行体系	61	5.5	411	33.5	213
ヒユ科雑草 多発生ほ場	新体系1	80	4.6	591	34.5	338
	新体系2	75	4.5	557	34.7	334
	慣行体系	76	4.1	514	34.6	323

注 ほ場は図1、図2と同じほ場、品種は「里のほほえみ」、収量は坪刈り収量。

[その他]

- 研究課題名: 1 多収阻害要因の解明と改善指標の開発に基づく安定多収生産技術の確立  
2 企業的農地有効活用体系の確立

- 予算区分: 1 外部資金(戦略的プロジェクト研究推進事業)  
2 県単経常

研究期間: 1 令和元年度 2 令和元～2年度

発表論文等: 日本雑草学会第59回大会(令和2年4月)